

(国語)

仲間と思いや考えを伝え合う言葉の力を高める指導法の工夫（第4次）

大阪市立敷津小学校 田上尚美 田邊浩世

1. 研究主題設定の理由

24・25年度の2年間、「仲間とともに、すすんで課題を探究する子どもを育てる～心と体をひらき、ともに学び合う体育科学習の創造～」を研究主題として、体育科を研究教科とした。その結果、言語活動の充実と運動量の確保の両方を意識して展開を組み立てることで、話し合い活動を活発にさせながら、体を動かす時間の確保につながった。

一方、自尊感情が低く、感情的になりやすく、言語による良好なコミュニケーションをとることが苦手な児童がいた。2年間の実践を通して、友だちへのほめ言葉や、励ましの言葉を聞くことができるようになってきたが、まだまだ改善の必要があった。

そこで、全学習活動の基盤となる、言語に関する能力を育成する必要があると考え、研究教科を国語科とした。言葉の力を身に付けることができれば、本校の課題の1つであるコミュニケーション能力を高めることが期待できると考えたからである。

2. 研究の趣旨

上記のように、これまでの研究では、「伝え合う」を研究の中心においてきた。伝え合うためには、「言葉の力」を高めることが必要である。しかし、「言葉の力」はすぐには身に付かないので、継続した取り組みを、さまざまな視点から考え、行った。

3. 研究の概要

昨年度までの2年間は、「書くこと」に重点をおき、『全校児童文集 敷津の子』（以下、『敷津の子』）を活用した取り組みを行った。また昨年度からは、「聞くこと」とも関連して、朝会での学校長の話聞き取り、要旨や感想を用紙にまとめる活動を行ってきた。

昨年度の「大阪市小学校学力経年調査」では、特に漢字に課題が見られた。漢字学習時の児童の様子を見ると、まず「読むことができない」だから、「覚えることができない」という現状だ。この悪循環を断ち切るために「漢字読み先習」を行う。「漢字フラッシュカード」を使い、次週学習する漢字を前の週の1週間で読み先習を行い、読み方を知ることとした。このフラッシュカードは、学校力UP事業コーディネーターの方に、全学年分の作成を依頼した。一方、「言葉の力」を高める土台づくりのため、全校で「暗唱詩文集」や「五色百人一首」にも取り組んでいる。

今年度も『敷津の子』で、自力で書くことができる児童を目指す。4、5月の段階で、どんな文種の作文を書くかを設定し、11月末に設定した、『敷津の子』執筆週間で、自力で下書きを書く。そのため、それまでの期間に定期的を書く活動を行う。そうして、設定した指定文字数程度の文を書くことを、今年度も目標とする。

（指定文字数：1年 200字、2年 300字、3年 400字、4年 500字、5年 600字、6年 700～800字）

「伝え合う」場の設定のために、生活科・総合的な学習の時間との関連した国語科の授業検討を行う。そして、身に付けた力を使って、「伝えるために、聞いたり、読んだりする」「伝えるために、書いたり、話したりする」ことを目指す。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

昨年度の「大阪市小学校学力経年調査」では、特に課題の1つであった漢字について「漢字読み先習」を行った。その結果、読みに自信を持って取り組む姿が見られた。その自信が「書くこと」に、そして、次週の漢字の「読み」へとつながっていった。「漢字フラッシュカード」は、新出漢字を使った熟語で書かれているものもある。6年生になると、既習の漢字の読みをヒントに読み方を想像して読もうとしていた。このようにして、「言葉の力」は少しずつではあるが、高まっていくと期待できる。

また、「全国学力・学習状況調査」では、国語A「書くこと」において、昨年度は全国平均より9ポイント低かったが、今年度全国平均より、2.7ポイント高くなっていた。これは、「書くこと」を研究し続けたことが結果につながっていると考えられる。

昨年度より「聞くこと」に関連して朝会での学校長の話を取り、要旨や感想を紙にまとめる活動では、発達段階に応じて、書く姿が見られた。学年によっては、話の中で難しい語句が出てきた時に、担任が意味を説明したり、教室に配架されている国語辞典等の辞典類で調べたりして言葉を増やしていった。週末には、朝会の話の内容と、よくまとめられていた児童の感想を「校長通信」として発行した。自分たちと近い子どもたちが書いた、見本となる感想を毎週読み続けることで、どんな感想を書くかよいかを自主学習する場となった。

『敷津の子』については、一つの目標を「自力で書き進めることができる児童」の育成として取り組んできた。明らかにここ数年で、抵抗感なく書き進めることができるようになった。それは、教職員がこの4年間の研究を通して、4、5月の段階で、どんな文種の作文を書くかを設定したり、11月末に設定した、『敷津の子』執筆週間までに、どんな手立てをすれば、児童が自力で下書きを書くことができるかを考えたりしてきた結果も一つの要因と言える。研究授業を重ねる中で、普段の学習の中で、相手意識・目的意識をどうやってもたせることが有効かを試行錯誤した。そしてそれを学習活動へと返していった。例えば、児童が書きやすい取材時の枠とはどんなものかを考えるとする。実際に児童が書く段階を、担任自身が体感し検討した。その時に、どんな言葉がけを行えば有効か、自分や書く文種に合った書く時の型を身に付けさせる指導法の工夫も行った。また、「伝えるために、聞いたり、読んだりする」「伝えるために、書いたり、話したりする」ために、教科書の単元を改編して、生きた学習活動の場となるようにもした。

(2) 今後の課題

「書くこと」で、自分の思いや考えを表すことについて、まだまだ二極化は見られる。少人数という環境を生かしたり、教職員で連携したりして、児童自身が文章の書き方を習得することができるようにこれからも指導にあたる。

「全国学力・学習状況調査」の質問紙調査から「伝え合う力」については、まだまだ低いと考えられる。学習活動の中で、交流の場を設定しているが、話したり聞いたりした上での、交流の手立てに課題が残る。普段の授業の中で、主体的・対話的な学びの場面を、いかに意図的に作りあげていくかを今後の課題とする。そして、何のために交流を行うのか、意図を明確にし、その後の学習活動に生きるよう設定していきたい。